

吹奏楽におけるポピュラー音楽楽曲の 導入に関する日米比較のための予備的研究

吹奏楽関連 CD の流通状況を中心に

Keywords

concert band, popular music, repertoire, CD and Vinyl Production, Japan and U.S.

大倉 恭輔

OHKURA, Kyosuke

Summary

吹奏楽の世界の中心的存在であるスクール・バンドのメンバーにおける、「聴く音楽」と「演奏する音楽」の分散傾向の要因を明らかにするための手がかりとすべく、日米の Amazon を利用して、吹奏楽系コンテンツの発売動向を確認した。

その結果、日本における発売タイトル数は1年間で102タイトルであり、アメリカは10年間で103タイトルであった。また、アメリカではポピュラー楽曲が収録したコンテンツ自体が少ないことが明らかとなった。

それらは、学校という場が芸術教育・人間教育をおこなう場であり、そこではポピュラー音楽などは相応しくないという価値意識が作用しているためと解された。同時に、大人と子どもの文化を区別するアメリカ / 西欧社会の価値観が、ポピュラー音楽系タイトルの販売・購入動向に影響を及ぼしているものと結論づけた。

問題の所在

わが国の音楽活動において、吹奏楽は人気のあるもののひとつである。たとえば、日本吹奏楽連盟の登録団体は、2015年10月時点で、14188団体となっている。(日本吹奏楽連盟, 2017) そうして、同連盟に加盟する団体の種別をみると、中学校と高等学校とで約80%を占めていることがわかる。さらに、小学校から大学までをあわせると約88%となる。(表1) すなわち、日本の吹奏楽は中・高校生によって支えられているといっても過言ではない。

表1 日本吹奏楽連盟加盟団体数

	小学校	中学校	高等学校	大学	職場	一般	合計
2014年	1,145	7,214	3,823	313	80	1,666	14,241
2015年	1,147	7,213	3,805	301	73	1,649	14,188

(全日本吹奏楽連盟, 2016: 2)

これらの、いわゆる「スクール・バンド」は、その形成の経緯や性格上、吹奏楽曲や吹奏楽用に編曲されたクラシック曲をレパートリーとすることが多い。都賀は、創成期の日本のスクール・バンドの活動内容が、「軍事教練・運動会・式典演奏・運動部の応援・地域への貢献」であり、しかも、それらは今日においてもほとんど変わらないことを指摘している。(都賀, 2013: 70) また、第二次世界大戦後、小・中学校の授業科目が「唱歌」から「音楽」へ移行し、器楽教育の重視がなされ始めたことも、スクール・バンドの隆盛の要因と見なしている(都賀 *ibid.*: 76)

日本の吹奏楽が、明治期に輸入され形成された軍楽隊に始まることは、多くの歴史書が明らかにするところである。同時に、学校教育の一環として組み込まれたスクール・バンドが、西欧のクラシック音楽すなわち「教えるべき/学ぶべき芸術音楽」との結びつきを強めるのは当然のことといえよう。

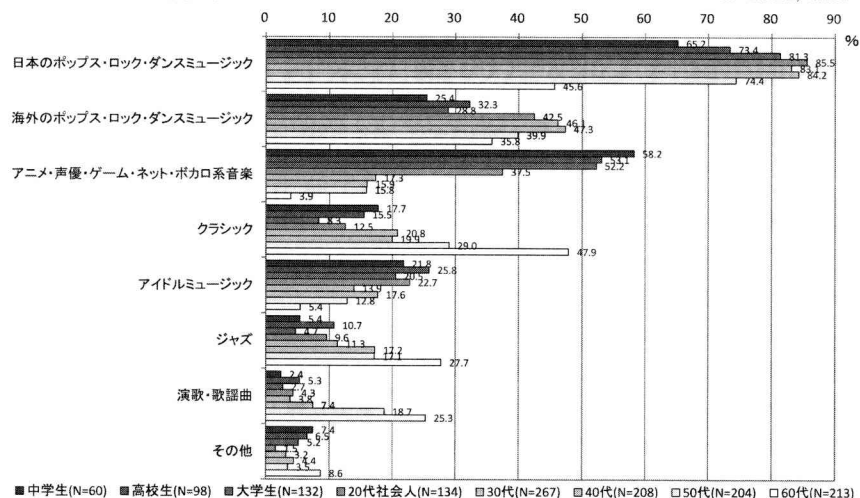
しかし、ここでひとつの疑問が生じる。スクール・バンドに所属している中・高校生達は、自分たちのレパートリーについて満足しているのだろうかと点である。吹奏楽曲やクラシック音楽にまったく興味を有さなければ、スクール・バンドに入部することはないだろう。しかし、日本の若者が一般的に聴取・愛聴しているのは、それらのジャンルの音楽ではない。

たとえば、日本レコード協会が2015年に実施した調査によれば、中学生の65.2%・高校生の73.4%は「日本のポップス・ロック・ダンスミュージック」をよく聴くと回答しており、「クラシック」を聴く層は、それぞれ17.7%と15.5%となっている。(図1)

また、こうした傾向は過去40年間、ほとんど変わっていない。

図1 ふだんよく聴くジャンル

n=2014, MA



(日本レコード協会, 2016 a: 6)

この調査からは、日本のポップやロックの愛聴者のうちあるいはクラシック音楽愛聴者のうち、どれほどの人間が吹奏楽の経験者であるかは不明である。しかし、ごく一般的に考えても、吹奏楽経験者の多くが日本のポップやロックの愛聴者でもあるとあってよいだろう。

では、日本の吹奏楽の担い手である中・高校生たちは、部活動で演奏している楽曲のジャンルとふだん愛聴している音楽ジャンルとの相違をどのように受けとめているのだろうか。たとえば、レパートリーの中にポップやロックやアイドル曲を含めたいとは思わないのだろうか。(注1)

大倉は、このような視点から吹奏楽におけるポピュラー音楽楽曲の導入の動向を、専門雑誌の付録楽譜を利用して内容分析をおこなった。その結果、1970年代から90年代にかけて、ポピュラー音楽の採択率が増加していることがわかった。しかし、2000年代以降には減少傾向となり、むしろクラシック音楽の採択率が増加していることも明らかとなった。(大倉, 2017)

ただし、この結果を理解するにあたっては、ふたつの背景を把握しておく必要がある。ひとつには、分析に使用した雑誌 (Band Journal) は、現在、わが国で唯一の活字メディアとしての吹奏楽専門誌であること。もうひとつは、ことスクール・バンド

の世界において、全日本吹奏楽連盟が主催する「全日本吹奏楽コンクール」で受賞することが大きな目標となっていることである。（近年ではその弊害についても論議があるほどである）そして、その動向の上に、同誌の付録楽譜の楽曲選定があるという点を忘れてはならない。

その意味で、実際にスクール・バンドに所属している中・高校生達が、吹奏楽曲・クラシック楽曲以外の、どのようなジャンルのどのような楽曲に興味を持っているのかを、さらに別の資料からも明らかにすることが必要となろう。同時に、聴いている音楽とやっている音楽の相違が日本独自のものであるのか、外国の事例との比較をおこなうことも必要となろう。

これらの作業を積み重ねることによって、吹奏楽とは何かという問いや音楽を楽しむことの意味を理解するための手がかりが得られるものと考ええる。そのような視点から、本稿では、CDを中心とした吹奏楽関連商品の動向をさぐることで吹奏楽愛好家たちの選好を明らかにし、さらなるリサーチ・クエスチョン確立のための手がかりを得ようとするものである。

また、日本の動向のみでなく、アメリカの動向にも目を向けることとする。アメリカは日本と同様に吹奏楽が盛んな国であるとともに、ポピュラー音楽の一大産出国でもある。そうした国で吹奏楽を演奏する若者たちが、吹奏楽曲・クラシック楽曲以外に、どのような音楽受容をなしているのかを知ることは、日米の吹奏楽界における共通点・相違点をあきらかにし、そこから相互理解につながる可能性があるという点で必要な作業と考えられるからである。

分析の方法と手順

音楽配信が普及する中、CDなどのパッケージ系メディアは、まだ音楽商品の中心にあるといってよい。たとえば、2015年度のオーディオ・レコードの売り上げは17000万枚・1826億円（前年比98%）であるのに対し、有料音楽配信は17800万回・471億円であった。（日本レコード協会, 2016 b: 1）つまり、有料音楽配信は、ダウンロード回数（レコード売り上げ枚数に対応）においてはほぼ同数であり、売り上げについては、前年比108%と伸びている。（レコードは98%）それでも、売り上げ額からいえば、配信はパッケージ系の25%ほどである。

そこで、本稿では、大手通信販売サイトの「Amazon」を利用して、オーディオレコード（CDなど）において、どのようなタイトルが販売されているのかの概略をみることにした。これは、吹奏楽系の商品の売り上げ枚数よりも、ポピュラー音楽が選

曲・収録されている CD の動向をみることに主眼を置いているためである。

Amazon には検索機能があり、「本・ミュージック・DVD」など大まかなカテゴリーを指定した後（指定しなくてもよい）、適宜、検索語を入れることで結果が表示される。（注 2） Amazon の検索のしくみには不明な点があり、売り上げ数のみによって表示されていないことが推測されることや、何らかの事情で検索結果が変動する場合があるという点で（注 3）、定量的な分析には不適な部分がある。しかし、発売年でソートできる機能があり、これを利用することで、近年の発売動向を容易につかむことができるという利点がある。

そこで、日本の Amazon については、「ミュージック」カテゴリーから「吹奏楽」を、アメリカの Amazon については、「CDs & Vinyl」カテゴリーから「concert band」で検索し、その結果をもとに若干の考察をおこなうこととした。（注 4）

結果と考察 1：日本における吹奏楽関連 CD タイトルの傾向

「ミュージック」カテゴリーから「吹奏楽」で検索したところ、2932 件がヒットした。これを発売年別にソートし、便宜上、上位 102 位までを分析対象とした。これは、発売年がある程度まで古くなると、Amazon およびそこを利用する出品業者の在庫状況が反映され、正確な出版動向がつかみにくなるためである。なお、ドラマ CD と DVD が各 1 点ヒットしたが、対象からは除いてある。ちなみに、対象が第 102 位となっているのは、発売年でソートした際、たまたまそこがひとつの区切りになったためである。

表 2 は、上位 25 タイトルにつき、タイトルと発売年のみを記したものである。掲載順位は発売年でソートした結果である。

表 2 Amazon（日本）にみる吹奏楽 CD の発売動向（2017.01.07 時点）

	タイトル	発売
1	真島俊夫 Original Works & Transcriptions ～三つのジャポニスム、GOLD POP～	2016
2	岩井直博 NEW RECORDING collections No.1 THE POPS ～心に沁みる日本の名曲編	2016
3	岩井直博 NEW RECORDING collections No.2 THE POPS ～憧れのアメリカ名曲編	2016
4	全日本吹奏楽コンクール 名門の饗宴! 大学・一般編 I	2016
5	全日本吹奏楽コンクール 名門の饗宴! 大学・一般編 II	2016

6	ソプラノと吹奏楽のための 万葉讃歌	2016
7	王様の箱 吹奏楽名曲集	2016
8	北海道教育大学スーパーウインズ 2015	2016
9	全日本吹奏楽コンクール 名門の饗宴! 高校編 I	2016
10	全日本吹奏楽コンクール 名門の饗宴! 高校編 II	2016
11	全日本吹奏楽コンクール 名門の饗宴! 高校編 III	2016
12	トッカータ・フェローチェ	2016
13	ニコニココレクション (初回限定盤) (DVD 付)	2016
14	アメリカの風	2016
15	タルカス (LP 盤)	2016
16	ニコニココレクション (通常盤)	2016
17	いにしえの時から	2016
18	全日本吹奏楽 名門の饗宴! 中学編 I	2016
19	全日本吹奏楽 名門の饗宴! 中学編 II	2016
20	20人のコンクールレパトリー Vol.2: 雲海の詩	2016
21	航空自衛隊 航空中央音楽隊 創設 55 周年記念アルバム 風 ～ Wind of Symphony ～ (初回限定盤) (DVD 付)	2016
22	航空自衛隊 航空中央音楽隊 創設 55 周年記念アルバム 風 ～ Wind of Symphony ～ (通常盤)	2016
23	全日本吹奏楽 名門の饗宴! プロット盤	2016
24	決定盤 ブラバン マーチ・フォーエヴァー	2016
25	TBS 系 日曜劇場「仰げば尊し」オリジナル・サウンドトラック	2016

第 1-3 位の「真島俊夫」「岩井直溥」は吹奏楽界で著名な作・編曲者である。いずれも、タイトルに「POP」の文字があることが目を引く。第 45 位および第 9-11 位、さらに第 18-19 位は、「全日本吹奏楽コンクール」のライブ音源を集めたものである。いうまでもなく、プロの演奏ではなく、大会に出場した中学・大学および一般部門のスクール・バンドや職場のバンドなどである。第 21-22 位は自衛隊音楽隊の演奏集であり、今日においても高い演奏水準を誇ることから、これまでも多くタイトル化されている。第 13 位および第 16 位の「ニコニコ」は、株式会社ダウンゴが提供している動画共有サイトおよびサービスの名称である。同社は、そこから派生したネット放送やイベント開催もおこなっているおり、同タイトルはそうしたイベント「ニコニコ超会議 2015 超音楽祭 (2015 年)」でのライブ音源である。イベントの特質から、収録

されているのはゲーム音楽やボーカロイドの「初音ミク」関連曲およびアニメのテーマ曲などであり、それを陸上自衛隊中央音楽隊が演奏している。また、第25位の「仰げば尊し」は、吹奏楽部と顧問教師を描いたテレビドラマのオリジナル・サウンドトラックである。

これらを見るだけでも、日本における吹奏楽関連 CD タイトルには、吹奏楽曲・クラシック楽曲以外の、ポピュラー音楽曲を中心としたものが商品化されていることがわかる。また、商品名からはわかりにくいですが、収録曲が吹奏楽曲に限られずにポピュラー音楽や映画・アニメなどのテーマ曲をまじえているものも多い。たとえば、第21-22位の航空中央音楽隊の2タイトルは、ともに吹奏楽曲・クラシック曲・ポップス・タンゴ・演歌・映画音楽から構成されている。

そこで、吹奏楽レパートリーにおける非吹奏楽・非クラシック曲の導入動向という視点から、102タイトルを収録内容別に分類した結果が表3である。

表3 日本の吹奏楽関連 CD タイトルの傾向

n=102

収録曲内容による分類	タイトル数
吹奏楽曲のみ	30タイトル（行進曲集・委嘱曲各1曲を含む）
クラシック曲のみ	13タイトル（現代音楽を含む）
吹奏楽曲＋クラシック曲	10タイトル
コンクール関連曲	6タイトル（課題曲集・自由曲集）
吹奏楽曲＋ポップス系	9タイトル
その他	34タイトル（ポピュラー楽曲・番組テーマ曲・ゲーム音楽など）

102タイトル中、非吹奏楽・非クラシック曲（ポピュラー系楽曲・番組テーマ曲・ゲーム音楽など）からなるものが34タイトル発売され、吹奏楽曲とポピュラー楽曲の組み合わせからなるタイトルを加えると43タイトルとなり、全体の42.2%を占めることがわかる。

いうまでもなく、その多寡について評価をおこなう基準はない。だが、いわゆるポピュラー音楽だけでなく、アニメやゲーム音楽のみで構成された CD タイトルが発売されていること、しかも、それを自衛隊の音楽隊が演奏していることなど、興味深い動向をみせているといつてよい。

日本の吹奏楽関連の CD タイトルが、吹奏楽曲・クラシック楽曲のみにとらわれず、そうした広がりをもっていることは、吹奏楽という形式で広義のポピュラー音楽を楽しみたいというニーズのあらわれであり、同時に、それらの楽曲をレパートリーに加

えたいという要求のあらわれでもあると解してよいだろう。

さらに、これら102タイトルすべてが2016年に発売されていることも注目しておくべきであろう。個々のタイトルの生産数は不明だが、音楽産業全体が売り上げ低迷に悩む中、平均すると毎月8タイトル以上が発売されている。さらに、2017年2月初旬の時点で、すでに48タイトルが発売されていることを附記しておく。これらは、日本の吹奏楽の世界が一定規模のマーケットとして機能していることを意味するものである。

結果と考察2：アメリカにおける吹奏楽関連CDタイトルの傾向

日本と同様の手順で、「CDs & Vinyl」カテゴリーから「concert band」で検索したところ、698件がヒットした。これを発売年別にソートし上位103位までを分析対象とした。なお、103タイトルで区切ったのは、日本でのデータと同様にそこがひとつの区切りになっていたためである。

なお、当該の検索語を使用すると、ロックバンドのコンサート・ライブ盤など、吹奏楽以外のCDがヒットする。それらを、内容確認の上で取り除いたものが、分析対象の103タイトルである。よって、当該検索語でヒットした698タイトルよりも、吹奏楽関連のCDなどの出版点数は少なくなっている。

表4は、上位25タイトルにつき、タイトルと発売年のみを記したものである。掲載順位は発売年でソートした結果である。

表4 Amazon（アメリカ）にみる吹奏楽CDの発売動向（2017.01.07時点）

	タイトル	発売
1	WPA Concerts (Various 1)	2016
2	WPA Concerts (Manhattan Concert Band)	2016
3	Evolution II	2016
4	The Music of Samuel R. Hazo	2016
5	Make the Season Bright	2015
6	30 Smash Hits of the War Years	2015
7	Crown Imperial	2014
8	Gershwin Performed by the U.S. Army Concert Band	2014
9	The Firebird Suite & 20th Century Works	2014
10	Glorious Journey	2014
11	Organ & Concert Band	2014

12	Music Under the Stars	2012
13	American Heritage Original Marches	2012
14	American Treasures	2012
15	Danish Royal Marches	2012
16	2012 Kentucky Music Educators Association (KMEA)	2012
17	Texas Music Educators Association 2012 Clinic/Convention	2012
18	Esprit De Corps	2012
19	2012 Florida Music Educators Association (FMEA)	2012
20	2012 Florida Music Educators Association (FMEA)	2012
21	2011 Midwest Clinic: Northshore Concert Band	2012
22	I Am an American	2011
23	American Mystic - Music of Alan Hovhaness - Centennial Collection	2011
24	Julie Giroux Presents: Concert Band Christmas Gone Crazy	2011
25	Sounds Of The Circus Vol. 54 - The Trombone Family Fillmore	2011

第1-2位は歴史的音源集である。「WPA」は「Works Progress Administration」(公共事業促進局)のことで、大恐慌時、ニューディール政策の一環として設置された機関である。その目的は公共事業による雇用の確保であるが、活動は多岐にわたっていた。それらの活動のひとつに、「Federal One」と呼ばれる芸術家救済プログラムがあった。そうして、このプロジェクトは音楽家の救済だけでなく、無料あるいは低料金によるコンサートを実施したという点で、国民の広義の音楽生活に大きな寄与があったとされている。(Library of Congress, 2017)

第4位と第8位は、それぞれ作曲家の作品集である。Samuel Robert Hazoは1966年生まれの作曲家で、今日の吹奏楽の世界では第一人者とされている。

第7位と第12-13位と第15位は行進曲集である。ことに、第7位にはスーザやエルガーといった、即位式に使用されるような古典的な行進曲のみが収録されている。

第16-17位および第19-20位は、いずれもアメリカ各州の音楽教育団体が主催するコンテストやクリニックでのライブ音源である。第21位の「Midwest Clinic」は1946年に開始された吹奏楽関連の講習会に端を発し、現在では国際的規模の催事となっている。すなわち、わが国の吹奏楽コンクールのようなものではなく「Conference」であり、選ばれたバンドがコンサートをおこなう場である。(The Midwest Clinic, 2017)

その他、第5位と第24位はクリスマス曲集、第6位は戦中ヒット曲集、第25位はサーカスやカーニバルや遊園地で流れる音楽を集めたものとなっている。

表5 アメリカの吹奏楽関連 CD タイトルの傾向

n=102

収録曲内容による分類	タイトル数
吹奏楽曲のみ	9タイトル (8タイトルは行進曲集)
クラシック曲のみ	13タイトル (現代音楽を含む)
吹奏楽曲 + クラシック曲	2タイトル
讃美歌	1タイトル
教育団体大会ライブ *	18タイトル (ジャンルは混交・クラシックなどを含む)
吹奏楽曲 + ポップス系	8タイトル
ポップス系	4タイトル (イーजीリスニング・シャンソン・ジャズ・ラテン)
歴史的音源	3タイトル (WPA:2・戦時ヒット曲集:1)
その他	45タイトル (サーカス音楽:39・クリスマス曲集:6)

*表3の「全日本吹奏楽コンクール課題曲」に対応するものではないが、ともに教育的背景を有するという点で項目化した。

そうして、これら 102 タイトルを分類した結果が表5である。

102 タイトル中、非吹奏楽・非クラシック曲 (ポピュラー系楽曲・サーカス音楽・クリスマス曲など) からなるものが52タイトル発売され、吹奏楽曲とポピュラー楽曲の組みあわせからなるタイトルを加えると60タイトルとなり、全体の58.3%を占めている。日本における広義のポピュラー音楽系楽曲を含むタイトルが占める割合は42.2%であったので、アメリカの方が16.1ポイント多いことがわかる。

しかし、アメリカ側のデータには特異な点がいくつかあり、そのまま比較することは困難である。

まず、アメリカでは吹奏楽関連のCD 発売数が少ないことがあげられる。上述のように、日本における102タイトルはすべて2016年に発売されたものである。これに対して、アメリカにおいて発売されたCDは、2016年:4タイトル・2015年:2タイトル・2014年:5タイトル・2012年:10タイトルとなっている。2012年に増えているのは、表4からわかるとおり、ケンタッキー州やテキサス州などの音楽教育団体の年次大会における選抜バンドの録音盤が発売されていることによる。それらを除くと、2012年度に発売されたのは5タイトルで、2014年と同数となる。

さらに、2011年以前は「Sounds of the Circus」シリーズが発売タイトル数にかんがりの割合を占めるようになる。そのため、アメリカにおける吹奏楽関連のCDタイトルの発売動向がわかりにくくなっている。(2011年には11タイトルが一挙に発売されている) そこで、「KMEA・FMEA・WASBE」といった教育団体によるタイト

表6 教育団体およびサーカス音楽を除外した年別タイトル数 n=103

年	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2014	2015	2016
タイトル数	2	4	9	3	4	8	5	5	2	4
	(0)	(2)	(3)	(8)	(11)	(28)	(5)	(0)	(0)	(0)

* 下段のカッコ内の数字は、教育団体およびサーカス音楽タイトルの合計。

ルと「Sounds of the Circus」シリーズを除外した上で、年別の発売タイトル数をまとめてみた。(表6)

こうしてみると、2008年と2011年がやや多いものの、いずれの年も発売タイトル数は2ケタに届いていない。アメリカは日本とならぶ吹奏楽大国であるが、音楽コンテンツとしての吹奏楽のマーケットは小さいものであるようだ。それは、言い換えれば、アメリカの吹奏楽愛好者たちは、吹奏楽を「聴く」ことに積極的でないことを意味する可能性が高い。

だとするならば、彼らは、なぜ音楽コンテンツを購入しないのだろうか。それは、購入してまで聴きたい楽曲が収録されていないためと考えられる。表2と表4を較べるとわかるとおり、あるいは表3と表5を較べるとわかるとおり、日本の吹奏楽関連CDにおける収録曲のジャンルは幅広い。ことに、吹奏楽人口の多数を占める中・高校生や大学生においてなじみ深い音楽（アニメ関連など）が多く含まれていることは特徴的である。

対して、アメリカの場合、「ポップス系」とカテゴライズしたものの、実際にはジャズやラテンなどであり、たとえば近年の映画やアニメのテーマ曲は含まれていない。その代わり、行進曲集が8タイトル発売されていたり、現代音楽を含むクラシック曲を収録したものが、日本と同数（15タイトル）発売されていたりする。これらは、中・高校生たちにとって楽しみの対象となる音楽とはいいいにくく、そのために吹奏楽がマーケットとして大きくなり得ない要因となっているといっていよう。

逆に、日米で類似している点もある。それは、コンクール関連のコンテンツである。日本の場合、2016年度1年だけでも、全日本吹奏楽コンクールのライブ音源が18タイトル発売されている。この他にも、コンクール課題曲の参考演奏盤や別種のコンテストの録音などが8タイトル出ている。これは、1年間に発売された全コンテンツの25.5%にあたる。

アメリカの場合、2006年から2016年までの間ではあるが、「KMEA・FMEA・WASBE」といった教育団体／国際組織によるものは18タイトルで、全体の17.5%

を占めている。日本の発売点数に較べれば小さいものの、年間の総タイトル数を考えれば、日本に負けないうぐらいのニーズがあるといえる。

これらのタイトルは、スクール・バンドに所属している中・高校生たちが購入するというよりは、指導者や学校単位で購入されるものと思われる。だが、自分たちと同年代の人間による高度な演奏に触れることは、彼らにとって学びであり刺激であり楽しみにもなっているだろう。また、そうした側面が彼らに内在しているからこそ、コンクール出場者によるコンテンツが商品として成立しているのだといってよい。さらに、これらのコンテンツは日米の吹奏楽のあり方を考える上で、ひとつの手がかりになることが示唆されるものである。

音楽教育における吹奏楽の位置づけとポピュラー音楽

前項では吹奏楽関連 CD の発売動向にもとづき、日米での吹奏楽コンテンツのあり方の相違点と共通点を確認した。加えて、吹奏楽が有する広義の教育敵側面に触れた。ところで、アメリカにおける吹奏楽、ことにスクール・バンドはどのように形成されているのだろうか。それらは、日本のスクール・バンドとどのような点で異なっているのだろうか。本項では、アメリカの音楽教育制度について、国立教育政策研究所の調査報告にもとづきながら整理をおこなった上で、教育と吹奏楽とレパートリーの三者の関係について俯瞰する。

いうまでもなく、アメリカの行政やそこでの多くの施策は州単位で策定され、教育課程についても同様である。だが、1992年に、ブッシュ政権によって The America 2000: Arts Partnership 宣言が出され、教育課程の標準化が目指されることとなった。1994年には National Standards of Arts Education が発表された。これはヴォランティアなもので法的拘束力は有しないものの、関連する芸術教育関連諸団体が、それにそった標準化カリキュラムを制定していった。

同調査では、イリノイ州とカリフォルニア州を例にとり、具体的な教育課程の編成について述べている。そこでは、以下のような状況にあることが報告されている。

表中の「バンド」は「Concert Band」のことであり、いわゆる吹奏楽をあらわす。つまり、アメリカでは音楽科の授業内に吹奏楽があり、生徒は正課として吹奏楽を学べるしくみになっているわけである。これは、日本のスクール・バンドが課外活動・部活動でおこなっていることとの大きく異なる点である。

そのどちらが優れたしくみであるかを決めることはできないだろう。だが、そのいづれにしても、レパートリーにポピュラー音楽を導入することは困難であると解され

表7 アメリカにおける音楽科の位置づけとカリキュラム

カリキュラム	イリノイ州	カリフォルニア州
音楽科の位置づけ	教科領域：Fine Arts の中のひとつ。(他に、ダンス・ドラマ・視覚芸術)	教科領域：Visual and Performing Arts の中のひとつ。(他に、ダンス・舞台芸術・視覚芸術)
配当学年	小学校（幼稚園を含む）から高校まで。	幼稚園年中組から高校まで。
科目内容 1 小・中学校：必修科目	General Music 中学第7学年まで。	General Music
科目内容 2 小・中学校：選択科目	バンド・オーケストラ	合唱・器楽アンサンブル・オーケストラなど
科目内容 3 高校：選択科目 必修はない。	バンド・合唱・オーケストラ	合唱・器楽アンサンブル・音楽鑑賞・音楽理論・シンセサイザー・レコーディングなど
地区や学校ごとの対応		バンド・マーチングバンド・ジャズアンサンブル・コーラスなど

*国立教育政策研究所（2003）をもとに大倉が作表。

る。一方は、「高級文化」としての芸術作品を与え理解させることが重要な目的であり、もう一方は、全日本吹奏楽コンクールという「芸術のコンテスト」での優勝を目指すものだからである。

小泉はポピュラー音楽教育に関するレビュー論文において、Barry and Walls (1999) の研究を紹介している。それは、教員養成課程の学生たちがさまざまな音楽の中でポピュラー音楽にもっとも反応しながらも、それを授業で使用することには疑いの念を示したというものであった。そうして、著者らは「好きであるというだけでは、学生が教室でその音楽を躊躇せずに用いる理由にはならない」と結論づけている。

小泉のレビューは重要文献を手際よくまとめたものであり、ある立場を主張するためのものではない。それでも、今日なお存在する「高級文化」志向の強さを思うとき、正課活動としての吹奏楽に、ポピュラー楽曲をレパートリーに採り入れることは困難であるといわざるを得ない。

また、大倉は、日本のスクール・バンドが「全日本吹奏楽コンクール」への対応として、過去の入賞校が演奏した曲目やコンテストで聴き映えのする楽曲選択が中心と

なっている可能性を指摘した。(大倉, ibid.) つまり、聴く音楽と演奏する音楽の使いわけがおこなわれており、その使いわけの理由が「コンクール」となっているわけである。自由参加の部活動においてさえ、そのような理由から「聴きたい音楽」と「やりたい音楽」が異なるという状況にあり、近年のコンクール至上主義的な様相をみる限り、そうした傾向は続くものと判断される。

ちなみに、日本の吹奏楽に関する詳細な論考を著した Hebert は、その第1章のタイトルを「The World's Finest School Bands and Largest Music Competition」と題している。(Hebert, 2013: 3) これは日本のスクール・バンドの実勢をよくあらわした表題であるといつてよい。

さらに、細川は他の国々(ことに非西洋)との比較において、日本のプラスバンドの受容・定着のしかたが異なっているという。プラスバンドの受容過程にはいくつかのポイントがあるが、日本においてはそのうちの「学校の役割」だけが機能したと分析する。生徒に規律を教えることは学校の役目のひとつである。そうして、(規律を重んじる)軍楽隊に由来するプラスバンドがその教育的効果ゆえに学校と結びつき、さらには学校がプラスバンドを育てるといふしくみが成立したのだという。(細川, 2001: 74-78)

結局、正課に採りいれられても課外活動としておこなうにしても、学校という枠組みの中で活動する以上、「芸術教育」「高級文化の伝承」という側面および規律・秩序を守れるという「人間教育」の側面から逃れられず、少なくともメインのレパートリーにポピュラー系楽曲を採択することはできにくいという点で、日米のスクール・バンドは共通性を有するのだといつてよい。

結論と今後の課題

本稿では、吹奏楽関連のCDの発売動向から、日米における吹奏楽の受けとめ方や音楽コンテンツのニーズのあり方が異なることを確認した。そうして、アメリカの音楽教育における吹奏楽の位置づけを確認しつつ、吹奏楽が正課にある場合でも日本のように課外活動としておこなわれる場合でも、そこに「学校/教育」という要素がある限り、ポピュラー系楽曲がレパートリーに加えられる確率は高まらない可能性を示唆した。

しかし、問題は学校だけにあるわけではない。そもそも、学校が子どもたちの自由になる場所でないことは自明である。また、音楽教育や吹奏楽にポピュラー音楽を導入すべきだという話でもない。問題は、今回のデータから明らかになったように、ア

アメリカにおける吹奏楽系コンテンツが、なにゆえに子どもたち・生徒たちの日常的に聴取している音楽/ジャンルと離れてしまうのかという点である。

まず、こどもの文化に対する価値観や態度のあり方の差が、ポピュラー系楽曲の採択の可否に影響していることを指摘しておくべきだろう。近年、日本のマンガやアニメなどの「サブ・カルチャー」が世界的に評価されているという報道なされる。しかし、一部の国々の一部の人間を除いて、小さな子ども向けコンテンツを大人が楽しむということはほとんどない。仮に、高校生・大学生でそれらのコンテンツのファンであったとしても、表だってファンであることは公言することはできない。

つまり、大人の文化と子どもの文化が明確にわかれている社会と、大人が子どもの文化を楽しむ続けることへの許容度が高い社会があり、アメリカは前者・日本は後者にカテゴライズされるのである。そうして、実際にレパートリーに採り入れるか否かは別にして、日本では吹奏楽形式で演奏されるアニメのテーマ曲や初音ミク曲を楽しむことが可能なのであり、それらのコンテンツが商品として成立するのである。

逆に、アメリカでは、日本よりも吹奏楽やブラスバンドの歴史が長いこともあり、クラシック曲や現代音楽などのほかに、伝統的・オーセンティックな吹奏楽曲や行進曲を重視する部分が多いものと推測される。表5にあるように、吹奏楽曲のみが収録されている9タイトルのうち、8タイトルが行進曲集であることなど、その証左といえるだろう。

だが、ここでもうひとつの問題が生じてくる。本論では「聴く音楽」と「演奏する音楽」の相違に着目し、それを吹奏楽関連CDの発売動向から確認した。それでは、そうした傾向は、すべての音楽コンテンツでそうしたことがいえるのだろうか。たとえば、楽譜の出版傾向はCDと同様なのだろうか。

CDは、聴くためのものである。言い換えれば、自分たち（の部）では演奏できない楽曲があっても聴くだけで楽しむことができる。これに対して、楽譜は演奏するためのものである。楽譜を眺めて楽しむという人間はほとんどいないだろう。おそらく、日米における楽譜の出版傾向はCDのそれと近いものがあると予想される。だが、もし、アメリカでの楽譜出版において多くのポピュラー楽曲を含んでいるならば、これまでの「聴く音楽」と「演奏する音楽」の分離傾向というテーマは成立しなくなる。

そこで、今後の課題として、日米における吹奏楽用に編曲された楽譜のうち、広義のポピュラー音楽がどれほど出版されているかについての調査をあげることができる。また、それによって、日本とアメリカの吹奏楽の世界が、なぜどのように異なるのかを明らかにする手がかりが得られることになるだろう。

注1

2010年代以降、吹奏楽はあらたな注目を浴びている。(秋山, 2013: 114) そのきっかけのひとつに、若者向けの小説「響け! ユーフォニアム」がある。2013年に出版された同作は、その後、マンガ化されるとともにアニメ化された。同作第1作で主人公たちが演奏した曲をジャンル別にわけると、以下のようになる。

吹奏楽曲

錨を上げて

イーストコーストの風景

大阪俗謡による幻想曲(1965年初演の管弦楽曲を、作曲家自身が吹奏楽用に編曲)

三日月の舞(架空の吹奏楽曲)

クラシック曲

だったん人の踊り

バレエ音楽《ダフニスとクロエ》第二組曲

ロック・ポップス

キャント・バイ・ミー・ラヴ(アニメ版ではYMOの「RYDEEN」に変更)

コパカバーナ

ジャズ

A列車で行こう

シング・シング・シング

練習曲

響け! ユーフォニアム(架空の曲)

さらさら星

個別の例ではあるが、現在の吹奏楽愛好者たちにおける楽曲の志向のイメージはつかめるといってよい。

注2

Amazonにおける検索のアルゴリズムは公開されておらず、どのような基準で検索結果が表示されるのかは不明である。おそらくは、売り上げ数のほかにレビュー欄での評価なども加味されていると考えられている。そのため、Amazonに出品している業者は、いわゆるSEO対策(検索結果上位に表示されるための工夫)に苦慮しているとされる。

注3

2017年2月13日に再検索をおこなったが、ヒットした件数・内容などに変化はみられなかった。(ただし、2017年1月以降に発売されたタイトルは除く)

注4

わが国では、「吹奏楽」のほかに「プラスバンド」(ブラバン)という用語がよく使用され、両者を同じものと理解する向きも少なくない。しかし、後者は、トランペットなどの金管楽器に打楽器を加えたものを指し、木管楽器を加えた編成である吹奏楽とは区別される。(欧米では、楽器編成や演奏内容に応じて、さらに細かく分類される)しかし、今回は、もっとも幅広い概念でありかつ活動形態である「吹奏楽」および「concert band」を検索語とした結果を掲出した。

references

秋山紀夫, 2013, 吹奏楽の歴史 ミュージックエイト

Hebert, David G, 2013 “Wind Bands and Cultural Identity in Japanese Schools” Springer

細川周平, 2001, 「世界のプラスバンド、プラスバンドの世界」阿部勘一 et.al. 『プラスバンドの社会史』青弓社

小泉恭子, 2000, 「ポピュラー音楽と教育」ポピュラー音楽研究 Vol.4

国立教育政策研究所, 2003, 音楽カリキュラムの改善に関する研究 — 諸外国の動向 —
Library of Congress, 2017, “New Deal Programs: Selected Library of Congress Resources”

<https://www.loc.gov/rr/program/bib/newdeal/fmp.html> (最終閲覧日: 2017.02.13.)

The Midwest Clinic, 2017, “Our History”

https://www.midwestclinic.org/about_midwest.html (最終閲覧日: 2017.02.13.)

日本レコード協会, 2016 a, 「2015年度 音楽メディアユーザー実態調査」

<http://www.riaj.or.jp/f/pdf/report/mediauser/softuser2015.pdf>

(最終閲覧日: 2017.02.13.)

日本レコード協会, 2016 b, 「日本のレコード産業 2016」

<http://www.riaj.or.jp/f/pdf/issue/industry/RIAJ2016.pdf> (最終閲覧日: 2017.02.13.)

研究ノート

大倉恭輔, 2017, 日本の吹奏楽におけるポピュラー音楽の導入 - Band Journal 誌の内容分析から - 実践女子大学短期大学部紀要 第 38 号

都賀城太郎, 2013, 「スクールバンドと吹奏楽の普及」戸ノ下達也編『日本の吹奏楽史』青弓社

全日本吹奏楽連盟, 2016, 「すいそうがく」No.202

<http://www.ajba.or.jp/suisougaku202.pdf> (最終閲覧日：2017.02.13.)